



Title	今どきの大学生と近代ハンガリー詩を読む：学びと共感をめぐる一考察
Author(s)	岡本, 真理
Citation	外国語教育のフロンティア. 2024, 7, p. 151-162
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94991
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

今どきの大学生と近代ハンガリー詩を読む ～学びと共感をめぐる一考察～

岡本 真理

Abstract

On the occasion of the 200th anniversary of the birth of Hungarian national poet Sándor Petőfi (1823-49), I have read many of his poems with students in the Hungarian language major class at Osaka University. Dividing his poems into the themes of “family/hometown”, “love/marriage” and “revolution/war” the participants of the literary class read several of his poems, including representative works from each category, and shared their thoughts on the works. Through an analysis of their impressions, this paper finds that the theme of “family and hometown” is more universal, and that Japanese university students today can easily relate to it. Conversely, the gap between times and cultures has led to differences in views on love and marriage. It has been verified that revolutionary poetry was rarely fully understood and appreciated due to insufficient knowledge of the period and its social background. Based on these, The study explored some more general issues in foreign literature education.

キーワード：ペテーフィ・シャーンドル、ハンガリー文学、外国文学、外国語教育

1. はじめに

2023 年はハンガリーの国民的詩人ペテーフィ・シャーンドル (Petőfi Sándor 1823-1849) の生誕から 200 年目にあたり、ハンガリーでは展覧会や関連書籍の発行、また一般市民向けのイベントなどが数多く行われている。文学研究拠点であり、それ自体が詩人の名を冠した首都ブダペストのペテーフィ文学博物館では、年間を通したペテーフィ特別展が開かれ、学校単位で申し込まれたグループに向けたインタラクティブな活動なども提供している (Múzeum-pedagógia)。地方在住者のためには、大型バスに展示を搭載した「ペテーフィ・バス」が全国 200 か所以上を回り、学校や地域のイベントに協力している¹。出版界では、Osiris 出版社から 2022 年にペテーフィ・シリーズとして、全詩集、散文集、戯曲集、書簡集、また伝記の新版も刊行された²。ハンガリー政府は 2022-23 年の 2 年間を「ペテーフィ・イヤー」と定め、50 億フォリントの予算を上げ、関連物出版助成や記念通貨・メダルの発行なども行っている³。国外でも、世界各地にあるリスト・ハンガリー文化センターを通じてペテーフィに関わるイベントが開催され、日本においても講演会やイベントでの展示をはじめ、ペテーフィの詩を朗読するスピーチコンテストが本学のハンガリー語専攻の学生たちを対象に行われる (2022 年 11 月大阪大学外国学図書館) など、活発な取り組みがあった⁴。

本学において筆者が担当するハンガリー文学の授業では、かねてからペテーフィ作品を積極的に取り扱ってきた。2022 年度と 2023 年度には、上記のような事情から、学期を通してペテーフィ作品を中心に据え、より集中的に読む機会を持った。さまざま

まなテーマの詩を学生らと読む中で、作品が強い共感をもたらしている場合と、逆にあまり心に響かない、むしろ違和感さえ与える場合があることを感じてきた。そこで、作品によるこの受容の違いは何に起因するのか、どのようなテーマや描写が彼らにより親しみを感じさせ、またより理解されやすいのかを、各回の授業で感想文を書き、発表し合い議論することを通して考察した（オンデマンドの学期では、感想文を集めて毎回全員にフィードバックを行った）。

本稿では、まずペテーフィの生涯と詩の特徴を簡単に述べる。そして、現代日本の若者である受講生がペテーフィの詩と思想をどのように受けとめ感じたかを、彼らの感想をもとに紹介する。これらから、授業で外国文学、特に近代詩を読み、空間と時代を超えて鑑賞し、より深く理解するためには何が必要とされるのかについて、考察を行うことにする。

2. ハンガリーの国民的詩人ペテーフィ：生涯と作品

ペテーフィ・シャーンドルは1823年1月1日、ハンガリー大平原の小さな町キシシュケーレシュで肉屋の長男として生まれた。上昇志向が強く教育熱心な父親により、小学校から親元を離れて転校を繰り返した。やがて詩や演劇に夢中となったが、1838年15歳の時に起こったドナウ川の大洪水によって両親が家財をすべて失ってから、学校を中退し、一時期は軍隊に入隊するなどした。彼を詩人として知らしめるきっかけとなったのは、20歳の時、その才能を認めた大詩人ヴェレシュマルティ（Vörösmarty Mihály）が文学仲間へ声をかけ、募金を募り、初詩集の出版を実現させたことであった。詩集は大ベストセラーとなり、これによりペテーフィは一躍時代の寵児となった。

1847年にトランシルヴァニア貴族の娘センドレイ・ユーリア（Szendrey Júlia）と出会い、翌年に結婚。1848年に起こった革命で、ペテーフィは詩人仲間らとハプスブルク当局に対して出版・言論の自由やハンガリー独立内閣などを求めた「十二か条の要求」を草案し、自身は「国民の歌」と題する詩を書いた。3月15日の決起の日の朝、検閲のない出版物として最初のものとなったのが、この「十二か条の要求」と「国民の歌」であった。ペテーフィはこの日何度も街頭に立ち、群集の前で自身の詩を朗読した。

この後、独立を求めるハンガリーとハプスブルク軍のあいだの戦争は約1年半に及んだ。ペテーフィは他の若い詩人や芸術家たちと同様にハンガリー国防軍に入隊し闘うが、1849年7月30日にトランシルヴァニア地方の戦闘で命を落とした。

自由独立を掲げるハンガリーの先頭に立って民衆を鼓舞し、26歳の若さで戦いの犠牲となったペテーフィは、現代にいたるまでハンガリー詩人の中でも特異な存在である。人生でわずか6年ほどの創作期間に千を超える詩を残した。先述の「国民の歌」や妻ユーリアへの一連の愛の詩などは、今日もハンガリー人の多くが暗唱できるほど親しまれ続けている⁵。

3. 授業における取り組み

3.1 なぜペテーフィの詩を読むのか？

先述のように、ペテーフィは今年特に話題を集めている詩人であるが、筆者は以前からハンガリー詩の中でもペテーフィの作品をもっとも多く授業で取り上げてきた。

その理由には次の3つが挙げられる。1つは、ペテーフィの詩を通して、ハンガリーの歴史、中でも近代のハンガリー人の意識について学ぶことができるからである。ペテーフィの生涯は1848年革命と密接に結びつき、その詩には民族意識の喚起と自由独立への希求、ハンガリー人の国民国家形成への願望というメッセージが強く込められている。2つめに、ペテーフィの詩にはバリエーションに富んだテーマがあるからである。家族や故郷への思い、庶民の暮らし、ハンガリー大平原の風景という日常的で素朴な詩にはじまり、恋愛、結婚、そして革命と戦争に至るまで、さまざまなテーマから教材を選ぶことができる。そして3つめに、その詩の言語の平易さである。19世紀前半はハンガリー語の近代化がはじまり、今日につながる正書法が完成された時期である⁶。また、ヴェレシュマルティなど同時代の他の詩人らに比べても、ペテーフィは圧倒的に簡素な言葉遣いが特徴である。これは当時、民衆のあいだに伝わる口承文学である民謡に注目が集まり、ペテーフィもまた民謡と見まがうようなことばとリズムをもった文体を好んで用いたからである。以上の理由から、ハンガリー詩の中でも、ペテーフィの詩はある程度の言語的特徴を理解すれば、外国人学習者にとってかなり読みやすく馴染みやすいと考えられる。実際に読んだ学生たちからは、「ペテーフィの詩が好きになった」「読んでいて楽しい」という感想を聞くことが多い。

3.2 調査の方法

本稿では、2022～23年度の授業における受講生の感想を分析する。対象者は、2022年度春夏学期、同秋冬学期、および2023年度春秋学期に筆者のハンガリー文学史の授業を履修した学生である。ハンガリー語専攻3年生が中心で、若干の4年生および5年生が含まれる。授業では毎週取り上げた作品の感想を互いに紹介しあった。2022年度春夏学期は、オンデマンド授業で16名がさまざまな詩を読み、課題に答えたあと、感想を書いてもらった。2022年度秋冬学期と2023年度春夏学期は対面授業で、受講生はそれぞれ15名と19名であった。毎週授業のおわりに感想を書いて紹介し合い、提出してもらった。本稿では、受講生の感想をなるべく網羅的に紹介するが、似た感想の場合は重複して記述せず、定量的分析は行わない。また、本報告でこれら受講生の感想文を使用することについては、CLEでの説明文揭示、メールでの説明、および授業中の口頭説明を通して、①氏名や個人が特定される方法で用いないこと、②すべての感想ではなく、一部の使用となること、また主旨を改編した引用は行わないこと、③不都合を感じる場合はその旨連絡をしてもらい、その場合は使用しないことを受講生全員に説明し、了解を得た（ただし、③の該当者はなかった）。

4. 学生の感想

この章では、授業で扱ったペテーフィの詩を3つのテーマに分けて、それぞれから1つの詩について内容を紹介したあと、受講生の感想を紹介する。テーマは、まず「家族・故郷」、次に「恋愛・結婚」、そして最後に「革命・戦争」である。対象の授業ではこの3つのテーマに当てはまる詩を複数読んだが、ここではその中からもっとも代表的な作品、または受講生からの反応が顕著であった作品を取り上げた。

4.1 家族、ふるさと

ハンガリー大平原に生まれ育ったペターフィは、その風景や大人になって再び故郷の町を訪れた際の感慨などを詩にしている。代表的なものは、大平原の情景や動植物を生き生きと描写した「大平原 (Az Alföld)」や、幼少期を過ごした町キシュクンフェーレジハーザを 25 歳で再訪した時に心に去来した思い出を抒情的に描いた「生まれ故郷にて (Szülőföldömen)」、また、都会から実家に戻ったある晩の父母とのやりとりを具体的に描写した「ある晩実家で (Egy estém otthon)」などである。ここでは「ある晩実家で」を取り上げる。この詩には、帰省した息子 (= 詩人) とその父、そして母の 3 人が登場する。それぞれの関係は以下のようにまとめることができる。

父親→若い頃からコツコツと肉体労働で家族を養ってきた自分の生き方とはまったく違い、芸術の道を夢中になって突き進む息子が理解できず、「地に足がつかない」と不満に感じ、もどかしく思っている。

母親→息子がどのような生き方をするかについて、是非を意見しようとする気持ちはなく、ただ帰ってきてくれることが嬉しい、元気で暮らしてほしいとだけ願う気持ち。

息子→自分とはまったく相容れない父親が苦手で、どうしても反発を感じてしまう。同時に、父親に認められないことが苦しい。それに対して、母親の自分に対する無条件な愛情には感謝の思いを持ち、母親を愛する気持ちは人一倍強い。

この詩を読んだ後に、自分が「ある晩実家で」のテーマで詩を書くなら、どのようなことを書きたいかを学生たちにたずねた。

【自分が詩を書くなら…】

- ・ 自分の仕事について話した後、家族の近況報告を聞くといい、一家だんらんの様子を書きたい。自分の仕事の楽しいことや不満を言った後に、親が応援していると私に言ってくれたり、父親と母親から最近の家族の様子がどんな感じなのかを聞いて笑いあっているような温かい情景を書きたい。
- ・ 着飾った母と仕事を早く切り上げた父と新しく買ってもらった服を着た私の 3 人だけで、行きつけの明るくて狭い焼肉店に行って、携帯も周りの客も翌朝また大阪に戻ることも気にせずに、ただ思いつくまま中身の無い会話をしている場面を描きたいです。
- ・ 両親はあまりたくさんしゃべるほうではありません。特に父は私が帰省しても大抵「おう」だけです。でもそれが私にとっては嬉しく安心します。もし私が帰省の一夜を詩に書くなら、そんなそっけない様子で私を迎えた両親と、なんの変哲もない料理を囲んで、なんの変哲もない会話を少しする情景を書いてみたいです。
- ・ 私は、幼い頃に両親が働き詰めで、ほぼ祖母との思い出しかありません。ずっと反抗期で、受験など大事な話もせず、恋愛、友人、部活、勉強関係の悩み事も全て友人にしてきましたが、本当は両親の意見も聞きたかったです。次に帰省した時には、お酒を飲みながら腹を割って将来や今までのことについて話してみたい。

- ・ できれば地元で就職してほしいと望む両親と一緒に酒を飲みながら語り合うという情景で、都会に就職して経験を積み、いつか海外に立ち上げるから、一緒に移住しようという夢を熱く語るような内容を書きたい。
- ・ 結婚を控え、その報告のために実家に帰った設定を書きたい。両親とお酒を飲みながら思い出話に花を咲かせ、私は感謝の想いを伝える。

以上のように、学生たちは各々の幼少期の回想、家族への思いを綴ってくれた。この詩に見られる父母への思慕や葛藤は、自身の経験に直接結びつけて想像するなど共感しやすいテーマであり、時代や文化を隔てた普遍的なものであることを強く感じさせる。

4.2 恋愛、結婚

ロマン派を代表する詩人であるペターフィにとって、恋愛は革命と並んで非常に重要なテーマであり、作品の数も多い。授業でも、妻ユーリアとの新婚の日々を描いたもっとも代表的な恋愛詩である「9月の終わりに (Szeptember végén)」をはじめ、遠距離恋愛の不安を吐露した「茂みが揺れている (Reszket a bokor)」、恋人たちのさりげない会話を描いた「2人で庭にいた時 (Kinn a kertben voltunk)」、それ以外にも「この世界が大きいように (Ez a világ amilyen nagy)」、「僕は木になりたい (Fa leszek ha...)」など多くの恋愛詩を読んだ。「茂みが…」では、「茂みが揺れている／なぜなら小鳥が止まったから／僕の心が揺れている／なぜなら君のことを思い出したから」という表現で始まり、「君のお父さんだって、お母さんだって、僕ほど君を愛することはできない」と包み込むような愛を穏やかな口調で恋人へ語りかけるもので、多くの学生が気に入った詩に挙げている。ここでは、ペターフィの恋愛詩の中でもっともよく知られた「9月の終わりに」の内容と学生の感想を紹介する。

「9月の…」は詩人らが結婚式直後に訪れ、数週間の新婚期間を過ごしたトランシルヴァニア地方の館で書かれた。まず1連目で、若さと生命の象徴としての「夏」と、老いと死を象徴する「冬」の狭間にある「秋」という季節が描写される。季節の移り変わりを、過ぎ去った恋愛期への憧憬と迫りくる（と詩人が予期する）死への漠然とした不安の板挟みに重ねたメランコリックな情景描写である。2連目では、妻に対し「もし僕が死んだら、君はこの亡骸の上に泣き崩れるだろうか、それともすぐに若い恋人が現れて、僕のことを忘れてしまうだろうか？」と問いかけ、最後は「(後者であれば) 君の脱ぎ捨てた未亡人の黒いベールを取りに夜中に墓の中から這い出よう。永遠に君を愛する僕はそのベールで涙を拭い、心の傷を縛ることだろう」と悲観的な嘆きに終わる。

この詩について感想を求めたところ、詩人の気持ちに共感を持つものと違和感を覚えるものと2つに分かれた。

【共感派】

- ・ 自分がもし新婚であっても、相手のことを大事に思えば思うほど、失うことを恐れる気持ちが芽生えると思います。
- ・ 妻を残して逝ったら、彼女は自分のことを忘れてほかの男性のところに行ってしまうかもしれない、という恐怖に支配されていたのだろう。自分が新婚であったとし

でも同じような考えに至ることはあるだろうと思う。私はふとした瞬間に自分の死について考えて恐ろしくなってしまうことがある。もしも生涯のパートナーができたなら、同じようにその人との別れについても憂いてしまうだろう。

【違和感派】

- ・ 新婚旅行ですでに死について考えていることに驚いた。
- ・ 新婚旅行中に詠んだにしてはかなり暗い詩だなと思った。
- ・ 若いのに成熟して達観している。
- ・ 今の若者と考え方が異なっていて驚き。まだ若いのに、一体それまでにどのような人生経験を積んできたか興味深い。
- ・ 妻への愛情があまりにも強いために、現在の幸せを感じると同時に、その日常がもしも消えてしまったらという心配から、妻を束縛してしまうのだろうと感じた。私自身は結婚する際はこれからの楽しみに夢中で、それほど深くは考えないだろう。
- ・ 漠然とした将来への不安はあるが、自分が死んだあと相手が他の人と結ばれるところまでうじうじ考えず、そのときはそのときだ、と割り切ってもう少し気楽に過ごせると思う。
- ・ 相手の誰かとの出会いや行動を、自分が制御できる権利なんてないと思う。きっと私は今幸せであるという事実で焦点を当てて、今後何があっても私は幸せだったと思いたした時に笑えるような感情のまま過ごしたい。
- ・ 「自分が死んだあと…」と勝手に想像されるのはちょっといやです。愛情あふれる詩の書き方は好きですが、実際に（このような人と）つき合うと大変だと思います。
- ・ 私は（離れるとわかっていれば）パートナーに新たな人生を歩んでもらうべく、すぐに離婚を選択すると思います。相手に未亡人というレッテルが張られてしまうと、今後の人生でよい結婚相手を見つけるのに不利になってしまうからです。一生私のことを忘れないで、というより、私のことは忘れて更に良い人生を送ってねという気持ちが強くなると思います。

このように、学生の多くはこの詩の愛情表現に少なからず違和感を抱いていた。また、授業では若者層だけでなく、60代半ばのコース履修生の男性1名も、非常に積極的な姿勢で参加し課題に取り組んだ。そのコメントを読むと、やはり年齢の問題ではなく、この詩の愛情表現は現代社会の恋愛観・結婚観からは距離があり、異質と感じられるとわかる。

えらくセンチメンタルな若者ですね。思うに、たとえ新婚であっても、一方が亡くなれば、残った方は基本的には精神的に自由。新たな恋愛をしようと、一切の恋愛を拒否しようと、誰にも拘束されるべきではありません。自分自身で考えて、生きていけばいいのです。要は、「死んだら終わり」です。(60代男性)

受講生の感想から窺える彼らの恋愛観の特徴は次のような点であろう。すなわち、「強く愛していても、相手は独立した個人であるので、制約を与えることはできないし、

執着しすぎない方がよい」「あまり先の不安より、今の幸せを優先し楽しむべき」、そして「穏やかで優しい愛へは共感するが、あまりに激しい執着心や悲観的な感情に対しては“ドン引き””するようである。

4.3 革命、戦争

最後に取り上げるのは、革命や戦争をテーマにした詩である。19世紀前半のハンガリーではナショナリズムの気運が高まり、1848年にはハプスブルク帝国からのハンガリー独立を求める革命に発展した。ペテーフィの詩には1845年頃から、封建的身分制や他民族支配に対する批判や皮肉、民衆（被支配層）の自由やハンガリー独立を訴える詩が増えていく。前述のように、「国民の歌 (Nemzeti dal)」は代表的な革命詩であるだけでなく、ペテーフィという詩人を象徴する詩として、今日もハンガリー人に広く認識されている⁷。授業でもしばしばこの作品を読むが、感想には「祖国を守ろうとする覚悟が読み取れる」「支配からの離脱やハンガリー独立への熱い思いを感じる」そして「民衆を扇動するペテーフィの雄姿に惹かれた」などのコメントと同時に、「祖国のためなら命を犠牲にしてもかまわないという考え方は、今の日本ではかなり珍しい気がします」「自由か死かという考え方は、それなりに自由な今の日本社会に生きていると、あまり共感できず、遠い世界の話だなあと感じてしまう」「先人や革命に思いを馳せることをハンガリー人は大事にしていると留学して感じたが、日本で今の若者にこのようなことが果たしてあるだろうか？」「現代では問題があっても声を上げる人は少なく、仕方なく流してしまう人が多い」などの、現代日本を生きる自身との違いの大きさに戸惑う様子も多くみられた。

ここでは、「国民の歌」と合わせて読んだもう1つの革命を題材にした寓話的な詩「犬の歌、狼の歌 (Kutyák dala-Farkasok dala)」を取り上げたい。この詩は非常に似た2つの短い詩を並べた形式をとり、一方が「犬の歌」、他方が「狼の歌」と題される。

A KUTYÁK DALA 犬の歌

Süvölt a zivatar 嵐がうなる
A felhős ég alatt; 雲垂れこめた空の下で
A tél iker fia, 冬のふたごの子
Eső és hó szakad. 雨と雪が降りしきる

Mi gondunk rá? Mienk それがなんだって？
A konyha szöglete. 台所の隅は僕らのもの
Kegyelmes jó urunk 優しいご主人様が
Helyezettett ide. ここに置いてくれる

S gondunk ételre sincs. 食べ物心配もない
Ha gazdánk jóllakék, ご主人様は腹いっぱい
Marad még asztalán, そうすりゃテーブルの
S mienk a maradék. 残り物は僕らのもの

A FARKASOK DALA 狼の歌

Süvölt a zivatar 嵐がうなる
A felhős ég alatt, 雲垂れこめた空の下で
A tél iker fia 冬のふたごの子
Eső és hó szakad. 雨と雪が降りしきる

Kietlen pusztaság 何もない荒野
Ez, amelyben lakunk; そこが僕らの住処
Nincs egy bokor se', hol 身を隠せる
Meghúzhatnak magunk. 藪一つない

Itt kívül a hideg, 外には寒さ
Az éhség ott belül, 体の内は飢え
E kettős üldözők その2つが襲い掛かり
Kinoz kegyetlenül; 僕らを非情に苦しめる

Az ostor, az igaz, そりゃたまには
Hogy pattog némelykor, 鞭が鳴ることもある
És pattogása fáj, それは痛いさ、でも、
No de: ebsont beforr. 犬の骨はすぐ治るもの

S harag multán urunk 怒りが収まれば
Ismét magához int, ご主人は再び呼び寄せ
S mi nyaljuk boldogan 僕らはその慈悲深い
Kegyelmes lábait! 足を舐めるのだ！

S amott a harmadik: そして 3 つめは
A töltött fegyverek. 弾を詰めた銃
A fehér hóra le 真っ白な雪の上に
Piros vérünk csepeg. 僕らの血が滴り落ちる

Fázunk és éhezünk 寒さと飢えと
S átlóve oldalunk, 脇腹は撃ち抜かれ
Részünk minden nyomor... 厳しいことばかり
De szabadok vagyunk! でも僕らは自由だ！

Pest, 1847. január (翻訳は筆者による)

この詩では主人の虐待を受けながらも屈辱的に従う「犬」が、自らの既得権益に固執し、それゆえハプスブルク帝国に支配されている現状に妥協して改革を起こそうとしないハンガリーの貴族たちを指す。荒野で飢えと命の危険というリスクを負いながらも自由を選ぶ「狼」は、革命を起こして自由と民族独立を勝ち取ろうとする貧しい民衆に置き換えることができる。授業では、感想と同時に「あなたは犬派ですか？それとも狼派ですか？」とたずねてコメントを募った。

【犬派】

- ・理想は狼のように生きたいですが、過酷な様子を考えると犬のほうがいいのかも思えないと思ってしまうのが怖い。
- ・私は厳しい環境では生きていけないと思うので、犬の方だなと思った。
- ・私はやはり死んでしまったら意味がないので、まず犬のキモチで現状維持します。
- ・実際、犬か狼どちらの生活がよいかと考えると、現代人の多くは犬の方を選ぶと思う。
- ・今の私の生き方は犬に近いと思います。世の中で不満はいろいろありますが、自分の命をかけてまで変えたいと思ったことがないからです。
- ・ペテーフイの革命に向けた思いの強さは伝わるが、私自身は狼でありたいと望みながら結局犬に甘んじてしまいそうです。あらゆる犠牲の上に変革していくことは難しいなと思います。
- ・狼の勇気や自立心はすごいとは思いますが、日本で生活する限りそうはなれないかなと感じます。

【狼派】

- ・私は狼のように自分自身で道を切り開きたいと思う。
- ・たとえ豊かでも、常に支配されて流されるのは苦痛。私は厳しい状況でも狼を選ぶ。
- ・私も自由に向かって前進したいので狼派ですが、今の日本で十分自由にやれているし、旗を上げて何かを改革したいと思う余裕もありません。でも犬派だとは認めたくない。
- ・私は狼のように自分で決めて自由に生きたいです。そうすれば自分で選んだことな

ので、何があっても後悔しないから。しかし日本では周りに合わせて犬のように従順に生きていかないと浮いてしまうし、生きづらいです。

感想では、3人に2人が「狼」ではなく「犬」を選んでいて。ここには現代日本社会に生きる若者の率直な考え方が現れているように思う。戦争や他国の支配を受けるなど大きな政治的危機を直接的に感じにくい「平和な時代」の、いわゆる「政治離れ」した現代の若者の、現実妥協的で穏当な志向といえる。一方で、そのような自身のあり方にある種のうしろめたさをにじませたり、自由や独立に命を捧げる詩人の生きざまについて、「立派だが自分には到底無理」といった、尊敬の念と同時に戸惑いを覚える様子が窺えた。また、3人に1人が苦難を伴っても自由を選ぶ「狼」であると表明している点も興味深い。ちなみに、この点では先の60代コース履修生の感想は、一般大学生のそれとはかなり違っている。

日本における一般的な詩とハンガリーの詩に大きな違いを感じました。日本の詩は、「私」の心の動きを細やかに描く、あるいは「自然」を美しく描くなど、個人の小さな世界で完結させています。それに対し、ハンガリーの詩は民族意識高揚を図り、ペターフィの詩は1848年革命に資するという一定の目的を持った非常に情熱的で、ある意味扇動的、大衆迎合的な作品と感じます。日本では存在しえない詩ですね。

この感想のように、社会経験や歴史・政治等の知識が一般大学生よりはるかに豊かであることが、明らかに外国文学を鑑賞する上でより鋭い洞察力を発揮させている。社会批判・社会風刺や革命を謳った作品の理解には、固有の時代背景を知り、その社会の政治的問題を理解する難しさを伴うため、読んでもピンと来ない、共感しにくいという反応が目立った。授業ではこれらの詩を読む前に、歴史・社会状況について詳しく説明することを心がけてきた。しかし、講義形式で一方的に聴くだけでは、学生たちはなかなか深い理解に達していないようである。課題を与えて自ら調べるなどの自発的な学びの工夫が課題である。

5. まとめ

ハンガリーの詩人ペターフィ・シャーンドルの生誕200年の機会に、本学のハンガリー語専攻の学生と授業で集中的に作品を読んできた。「家族・故郷」「恋愛・結婚」「革命・戦争」の3つのテーマに分け、それぞれの代表的な作品を鑑賞し、感想を書き、紹介し合った。ペターフィの文体は率直かつ素朴であり、ハンガリー語学習者にとって比較的なじみやすい。それでもなお、現在の日本人大学生が近代ハンガリーのロマン派詩人を理解し鑑賞する上で、時間的・空間的また文化的なギャップは大きい。

今回の調査では、「家族・故郷」といった普遍的なテーマでは、かなり共感性が高いことがわかった。離れた両親や家族への思いやり、また「故郷へのなつかしい思い」に対しては、時間的・空間的・文化的な差異を越えて多くの学生が共感した。「恋愛・結婚」に関しては、自然でさりげない愛情表現を好む一方、激しすぎる愛情表現は苦手と感じ、嫉妬や悲観的表現のようなネガティブな愛情表現に対しては、「ちょっと重い」や「め

んどくさそうな人」などと一歩引くような冷めた反応が窺えた。しかし、この違和感はある意味で共感しようとする心的作業の裏返しでもあろう。つまり、ヨーロッパの近代ロマン派詩人の恋愛詩を読みながらも、現代日本の大学生である自身が仮にそのような恋愛表現の対象であったらと想定して作品を鑑賞した結果といえる。3つ目の「革命・戦争」の詩では、当時の社会状況への理解が不足していることが、作品の理解を妨げているといえる。「よくわからないけど、大変そう」であったり、「昔の人は若くてもちゃんと考えていて立派」というように、まったく違った想像しがたい時代や社会について、漠然とした理解の中で共感を持つことは相当難しいことが判明した。

今回の感想文の分析から、時代も社会も大きく異なる外国文学を読み鑑賞するには、外国語という壁以外にさまざまな超えるべき問題があることが再確認できた。もちろん、外国文学を学ぶことにおいて、わが身に引き付けて共感できることだけが価値あるわけではない。むしろ、作品や作家のおかれた歴史的文化的コンテクストを学び、作品を通して未知の感性や思考を理解することが、外国文学を学ぶことから得られる重要な成果であろう。その学びのプロセスで感じた驚きや違和感から、未知に対する想像力を培うことができる。それが、ひいてはより次元の高い共感を可能とするのではないか。今後も、ハンガリー詩の中からよく知られた代表的作品と並んで、これまで取り上げたことのない作品も積極的に授業に導入していきたい。そして、受講生の反応や感想に注意を傾け、インタラクティブな授業の展開を心がけながら、外国文学の鑑賞力を高める工夫をしていければと思う。

本稿は、科学研究費補助金・基盤研究(C)「国家変容と国民文学運動に関する事例研究：近代ハンガリーの文学団体とカノン形成」(課題番号 19K00498、研究代表者：岡本真理、平成31年～令和5年)を用いた研究成果の一部である。また、2023年6月25日に行われた第49回日本ウラル学会研究大会(東京外国語語大学本郷サテライト)での研究発表を基にして、大幅に加筆・補完したものである。

注

- 1 ブダペストのペテーフィ文学博物館の展覧会「詩人になるべきか否か」Petőfi Irodalmi Múzeum <https://pim.hu/hu/kiallitas/kolto-lenni-vagy-nem-lenni>
「ペテーフィ・バス」の巡回展示 https://pim.hu/sites/default/files/page/attachments/sajtoszoveg_petofi_busz.pdf
- 2 2022年にOsirisからシリーズで8冊が刊行された。Szalisznyó Lilla - Zentai Mária, *Petőfi Sándor összes prózai írása és levelezése, Petőfi Sándor próza- és drámafordításai*, Kerény Ferenc, *Petőfi Sándor összes versei, Petőfi Sándor élete és költészete* - Osiris Irodalomtörténet (új kiadás) などがある。
<https://kronikaonline.ro/kultura/uj-petofi-sorozat-az-emlekevre-az-irodalomtorteneti-kotetek-mellett-muveszettorteneti-kiadvanyokat-is-terveznek#>
- 3 詩人の生誕200年にちなんで、国民銀行は2013年4月11日に200フォリント硬貨100万個を発行し、流通を開始した。これと並んで、3万フォリント記念銀貨と7500フォリント銅貨の発行も始めた。<https://www.mnb.hu/bankjegy-es-erme/emlekermek/2023/uj-200->

ft-os-forgalmierme-emlekvaltozat-es-kulonlegesen-nagymeretu-emlekermek-petofi-szulesenek-bicentenariuma-alkalmabol

- 4 リスト・ハンガリー文化センター (Liszt Intézet Magyar Kulturális Központ) は、現在世界 24 か国の 26 都市に設置され、その主な活動は、ハンガリー文化を保護し広く知らせること、ハンガリーと当該国との文化的交流を促進し、文化・教育・学術的共同事業を支援すること、またハンガリー語教育の提供などが掲げられている。<https://culture.hu/hu/budapest/kulfoldimagyarintezetek>
- 5 ペテーフィの詩がハンガリーで広く知られ慕われている証左として、学校教育のカリキュラムにおけるペテーフィ作品の採用状況に言及しておきたい。日本の学習指導要領に相当する国民基礎教育計画 (Nemzeti Alaptanterv) では、小学 3 年生で「国民の歌」、5 年生で長編叙事詩「勇者ヤーノシュ」を、その後 7 年生で「大平原にて」「9 月の終わりに」をはじめ、さまざまなテーマの抒情詩、10 年生にはペテーフィの生涯と作品テーマを総合的に学習することが定められている。<https://tudasbazis.sulinet.hu/hu/magyar-nyelv-es-irodalom/irodalom>
- 6 ハンガリー語は 19 世紀前半、1800 ～ 20 年代の言語改革運動期を経て、1830 ～ 40 年代の学術諸団体の組織化や 1844 年のハンガリー語を公用語とする法制化によって、一連の近代化過程に区切りをつけた。1843 年には文法・正書法が公式に決定した (A magyar nyelv rendszere)。ペテーフィはちょうどこの近代化の完成期に詩を公表し、その言語は 1 世代前に比べると現代ハンガリー語に大きく近づいたといえる。(Kiefer et al. 2006: 502-6)
- 7 多くの幼稚園や小学校では、毎年 3 月 15 日の祝日に合わせて行事を行い、幼いころからの詩を暗唱することが多いため、ハンガリーでは大人でもこの詩の冒頭部を暗唱できる人が多い。

参考文献

Illyés Gyula

1936 *Petőfi Sándor*. Szépirodalmi könyvkiadó. Budapest.

Kerény Ferenc

2002 *Petőfi Sándor élet-kép sorozat*. Elektra kiadóház. Budapest.

Kerény Ferenc

2008 *Petőfi Sándor élete és költészete*. Osiris. Budapest.

Kiefer Ferenc (eds.)

2006 *Magyar nyelv*. Akadémiai kiadó. Budapest.

Margócsy István

2001 *Petőfi-kísérletek. Tanulmányok Petőfi Sándor életművéről*. Kalligram.

Petőfi Sándor

2001 *Petőfi Sándor összes versei*, Osiris. Budapest.

Sótér István (eds.)

1964-66 *A magyar irodalom története I-IV*. Akadémiai kiadó. Budapest.

ホームページ

Sulinet データベース

<https://tudasbazis.sulinet.hu/hu/magyar-nyelv-es-irodalom/irodalom>

ペテーフィ文学博物館ペテーフィ特別展

<https://pim.hu/hu/kiallitas/kolto-lenni-vagy-nem-lenni>

Petőfi 200 Múzeum-Pedagógia <https://pim.hu/hu/petofi-200>

ペテーフィ生誕 200 年記念巡回展覧会

https://pim.hu/sites/default/files/page/attachments/sajtoszoveg_petofi_busz.pdf